

～突撃★ドメーヌ最新情報！！～

◆VCN°12 ピエール=オリヴィエ・ボノーム

生産地方：ロワール

新着ワイン6種類♪

VdF ヴァンクウール・ヴァンキュ・ブラン 2023 (白)

2023 年は、収穫直前にショウジョウバエのスズキが猛威を振るった年。ボノーム曰く、白は特にシュナンがスズキの標的に遭い厳格な選果が必要だったとのこと。ちなみに、今回ラ・テニエールのシュナンは、ラ・テニエールの品質に達しなかったという理由でヴァンクウール・ヴァンキュにアッサンブラージュされている。醸造は、フレッシュさを生かすために樽は使用せず全てタンクで発酵熟成させた。出来上がったワインは、ロワールの白らしい生き生きとしたフレッシュな辛口に仕上がっている！昆布ダシのような澄んだ旨味とほんのりビターなミネラルとのハーモニーが絶妙で、清涼感のある味わいは魚介料理全般に良く合いそうだ！

VdF ヴァンクウール・ヴァンキュ・ルージュ 2023 (赤)

今回のヴァンクウール赤は、前年同様にシェール川沿いの石灰土壌のガメイをベースに、収量の多く採れたボノームの自社畑 Cheverny (旧 Vercheny) のピノノワールがアッサンブラージュされている。2023 年のガメイは、ショウジョウバエのスズキの猛威に遭った。ボノーム曰く、スズキによりお酢になったブドウを厳格に選果するため収穫者 30 人を総動員したとのこと。その結果、ヴァンクウール赤が一番コスト高になってしまったそうだ。出来上がったワインは、ロワールのガメイらしいコクとピノノワールの繊細な果実味のハーモニーが絶妙な野趣味溢れる味わいに仕上がっている！酒質がエレガントでありながらも構成がしっかりとしているので、今飲むのであれば鴨などのジビエ料理、もしくは数年熟成させても面白そうなポテンシャルのあるワインだ！

VdF メリエ 2022 (白)

2022 年は、春の遅霜によりブドウが減収だった。全体を通して水不足の年だったが、収穫直前に雨が降ったおかげでブドウの糖度も下がり最終的にロワールらしい清涼感のある爽やかなワインに仕上がった。前年の 2020 年はファイバータンクで全て発酵させてから樽で熟成させたが、今回は 100%樽発酵熟成を行っている。出来上がったワインは、前回リリースした 2020 年よりもシャープでスレンダー！みずみずしい白桃のような優しいエキスとメリエ・サンフランソワの特徴でもあるタンニンにも似たほんのりビターな収斂味が何とも心地良い！開けたて少し還元香があり、すぐに飛ぶが気になる方はカラフすることをおススメ♪

VdF ロルモー・デ・ドウ・クロワ 2023 (白)

2023 年は、収穫前にショウジョウバエのスズキが猛威を振るったため、ブドウが完熟する前に早摘みし厳格な選果が必要だった。前回の 2020 年は、半分ファイバータンク、半分アンフォラを使いマセラシオンで仕込んだが、今回は潜在アルコール度数 11%のライトなブドウ果汁を生かすためにマセラシオンはせず、ファイバータンクを用いて 100%ダイレクトプレスでフレッシュなワインに仕上げた。出来上がったワインはみずみずしくスレンダーで旨味のある液体と酸がスッと五臓六腑に染み入るような優しい味わいに仕上がっている！まさに透明感のあるミネラルエキスを飲んでいるようなクリスタリーなワインだ！

VdF ロモランタン 2022 (白)

フランスでは誰もが知る有名大物歌手アラン・スションの別荘地内にあるロモランタンの畑。20 アールほどの広さだが、最初ティエリー・ピュズラが管理し、そこをボノームが 2020 年に引き継いだ。2022 年は、収穫前の 9 月中旬まで豊作が期待されていたのだが、前年同様に収穫の直前に鹿の被害に遭い、最終的に収量が 15hL/ha、400L 樽 1 樽分しかできなかった。だが、出来上がったワインは品質が高く、キレのあるタイトな味わいはまさにロモランタンそのもの！アルコール度数 13%とは思えない清涼感と、レモンやグレープフルーツなどの柑橘系のほろ苦さがあり、ボノームの兄貴分ティエリ・ピュズラをして「これぞ The ロモランタン！」と

言わしめるだけのポテンシャルの高いワインに仕上がった！開けたては少し還元香があるのでカラフすることをおススメ。ボノーム曰く、2022年はロモランタンのグレートヴィンテージなので、出来ればあと5年以上置いてから飲んでほしいとのことだ！

VdF ラ・テニエール 2023 (白)

2023年は、ショウジョウバエのスズキの被害に遭った年。特に被害の大きかったシュナンはヴァンクウール・ヴァンキュの白に回し、今回はムニユピノ 100%で仕込んだ。醸造は、古樽入れ替えのタイミングに当たったため10樽中新樽を2樽使用している。出来上がったワインは、落ち着きのあるピュアな優しいエキスの中にムニユピノから来る重心の低い酸と滋味深いミネラルが融合したエネルギー感ある味わいに仕上がっている！余韻も長く、体の底からじわっと染み入るダシのような旨味は、野菜や魚介などの素材の味わいを生かしたシンプルな料理と相性が良さそうだ！

ミレジム情報

2022年は、ブドウが早熟で収量にも恵まれた当たり年！冬のスタートは暖冬で雨が多かった。3月半ばに5月中旬並みの暖かさが続き、ブドウは一斉に芽吹いた。4月に0℃前後まで下がる寒波が降り、シェール側のピノノワールやヴィエーユ・ヴィーニュのメリエ・サンフランソワなど一部に霜の被害があったが、ほとんどのブドウは影響がなかった。開花は例年よりも3週間ほど早く、ソーヴィニヨンの中には5月下旬に終わるものもあった。また、病気においては、6月まで適度に雨が降ったことで、一部オイディオムが蔓延したが、散布を適時に行ったことで繁殖をうまく抑えることができた。ブドウの成長の勢いは止まらず、6月終わりの時点で早期収穫、そして豊作が予想された。7月に入るとぱったり雨が止み猛暑と日照りが続いた。8月は猛暑がいったん落ち着くが、畑は若干水不足の傾向にあった。収穫直前の9月20日に20mm前後の雨が降ったが、ロモランタンはその前に鹿の被害に遭い、またメリエは霜の被害により最初から房が少なかったため豊作で締めくくることができなかった。だが、その代わりに、収穫したブドウの品質は近年にない高品質なものだった。

2023年は、前年同様にブドウの収量に恵まれたが、収穫時にブドウの腐敗が始まったため厳しい選果が必要だった。冬は寒く適度に雨も降った。春は4月初めにシェール川沿い一帯の畑に寒波が降り、低地にあるムニユピノの畑が一部霜の被害に遭った。だが、全体としては冬が寒く芽吹きが遅かったおかげで、大きな被害はなかった。以降6月まで適度に雨の降る比較的温暖な天候に恵まれ、ブドウの成長も順調だった。だが、7月に入り一転、雨が少なく気温の上昇が続き、この冷夏によりブドウの成長にブレーキがかかり、不安定な天候は8月終わりまで続いた。9月に入り急に夏が戻ってきたかのような猛暑に見舞われた。ブレーキの掛かっていたブドウが急に成熟のスピードを上げたことと、同時に2014年以来久々にショウジョウバエ「スズキ」が猛威を振るった影響によりブドウの腐敗が広がり、収穫時は非常に厳格な選果を余儀なくされた。

「ヨシ」のつ・ぶ・や・き

5月の終わりに今回リリースするヴァンクウール・ヴァンキュ 2023年の試飲も兼ねてボノームを訪問した。ボノームに今年のロワールの状況を聞いたところ、2024年は例年よりも涼しく雨の多い天候が続いているとの回答が返ってきた。彼が言うには4月、5月はほぼ毎日雨が降り、気温も3月並みに低く朝はオーバーが必要なくらい寒かったそうだ。「気温が低いので今のところ病気の蔓延はないが、その代わりに雑草の伸びが半端ない」と嘆くボノーム。5月終わり時点でもつばらの畑作業は草刈り、草刈り、草刈りの連続で、刈っても直ぐに生える雑草にかなり手こずっている様子だった。実際、雑草がどんな状態なのか目で確かめたかったので、ボノームに頼んで畑に連れて行ってもらった。

これはボノームのガメイの畑。(写真①)なるほど…ブドウ畑が覆い隠れるほど雑草が伸びている。驚いたことに、この畑は約2か月前に一度きれいに草刈りを終えていたら



(写真①) うっそうと雑草の生い茂るガメイの畑

く、今年はいかに雨が強く雑草の勢いが強いのか良くわかる。ボノーム曰く、本当であれば春先に一度畝全体を根こそぎトラクターで掘り起こすような土お越しをしたかったのだが、雨により畑が常にぬかるんでいてトラクターを思うように入れることができなかつたそうだ。「その作業の滞りツケが今雑草の猛威となって返ってきている



…」とぼやくボノーム。今は効率と時間短縮のため、写真のように土お越しはせずとりあえず人やトラクターの通り道だけをさっと短く刈る応急処置を図っている。(写真②)「これくらい雑草がしっかりと根を張ると逆に重いトラクターもぬかるまないので、畝に入れる道だけ応急に作ればトラクターにより散布が可能となる」。彼が言うには、これから開花の時期を迎える上で最優先しなければいけない作業は病気予防の散布であり、人海戦術で行っていたら間に合わない待ったなしの状況にあるようだ。

(写真②) トラクターの通り道だけ草を刈ったガメイの畑

そして、これはとりあえず予防のための散布が終わったソーヴィニヨンブラン。(写真③) 葉に付いた白い斑点がボルドー液だ。「幸い、まだこの時期にしては気温が寒く、雑草が生い茂っていても病気がほとんど見られない。だが、今年のように雨の多い年は、散布してもすぐに雨で散布液が流れ落ちてしまい、また、気温が上がるとすぐに湿気がこもりミルデューなどの病気が蔓延するリスクが高くなるので全く気が抜けない。特に、今回のようにブドウの木のまわりの雑草がまったく掃除されていない中での散布となると、ボルドー液の当たる面積が少なく効果が半減する可能性もあり、そこが一番の懸念する点だ」と彼は語った。



(写真③) ボルドー液を散布したばかりのソーヴィニヨンブラン

ちなみに、今この文章を書いている7月8日時点の畑状況をボノームに質問してみたところ、開花は作業努力の甲斐あり順調に終わったようだ。だが、懸念していた雑草の繁殖と湿気によるミルデューの猛威が続いている様子で、散布と草刈りは絶え間なく行っているが追い付かず、今年はブドウの減収も視野に入れているとのこと。

今年は口ワールにとっても厳しい年となりそうか…! ?

(2024.5.29.ドメーヌ突撃訪問より)

※弊社HP資料にて、カラーでサイズの大きい鮮明な写真をぜひご覧くださいませ